

女性目線で化粧品の土台つくる

「将来の目標は？」
「専業主婦です」。

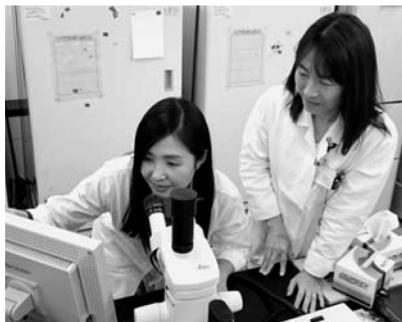
2000年春、今日まで続く研究生生活のスタートとなる大学研究室を初めて訪れた日のことである。研究指導いただく教授からの質問に対するものとして思慮を欠いたこの回答は、幾度となく話題にされ、その度に身が縮む思いである。15年後の今、研究員であり主婦である。考えが180度変わった結果かというところでもない。

凛としていきる

理系女性の挑戦

ぶれない軸で、揺れをエネルギーに

世話になった指導教授には分子を並べる面白さを学んだ。現在、化粧品的基础物性研究に携わっている。近年、多様化するお客さまの価値観に寄り添うものづくりが求められており、その基盤となる技術を創る仕事である。



私たちが女性研究員は、化粧品ユーザーの一人でもある。これは大きなアドバンテージ。自身が望むことの「先」を追求することが次の研究業務につながることもある。

残業はせず、決まった時間に退社する。終業後は5歳児の母。駅まで走る。遊び、笑い、踊る息子との会話を楽しみつつ、夕食の先輩社員と実験中。化粧品をマイクロメートルオーダーで観察する

支度をする。会社の制度に支えられ、上司や同僚に恵まれ、成立する日々。だが、不安に駆られることは少なくない。これでよいのだろうか？研究員として、親として。

地域や環境による差はあるだろうから一概にくることはできないが、私たちの年代は現在変わりつつある男女観、特に女性観に対してまだ迷い、戸惑いのある世代ではないだろうか。小学校時代、帰宅すれば母親が待つ子供がほとんどであった。私自身、「〇〇ち

やんのお母さんはお仕事して、お家にいないんだって」と疑問を口にした子供だった。自分の中に混在する母親像に、いまだ揺れ動くことがある。

しかし、この揺れこそが、今の私の支えでもある。揺れが芯を強くする。芯が、軸が強ければ揺れは大きなエネルギーとなる。研究員として、時間は最大限に活用し、より多くを実験に充てる。ユニケーションも大切に。親として、息子との貴重な時間は笑顔で過ごす。時間がなくても一汁三菜は譲らずに。「今の目標は」。揺れる自分を受け入れ、

それをエネルギーに、前に進むことである。

企画協力・日本女性技術者フォーラム（JWF）
（火曜日に掲載）

資生堂リサーチセンター 研究員

杉山 由紀



＜プロフィール＞2003年資生堂入社、現在に至るまで研究員として勤務。化粧品に関する基礎物性研究、技術開発を扱う部門に所属し、主にコロイド・界面化学に関する研究に従事している。